

いところから学んだ大切なこと

朝霧中学校

三年

内藤

綾音

私のいところはダウン症です。ダウン症は、障がないの方に比べると成長がゆっくりと進む障がいです。でも、とても優しく穏やかでかわいらしく、私はいところのことが大好きです。

いところが生まれてくる前に私は母から「生まれてくる赤ちゃんは障がいを持っているんだ。」と伝えられていました。当時私は幼稚園生でした。その時から、母がしていたボランテニアの影響で、ある程度障がいについて知っていたのですが、当時の私は障がいがあるというのは、かわいそうなことだと思っていました。さらに、いところの母が「綾音ちゃんみたいな元気な子を生んであげたかった。」と泣きながら言っていたというのを聞いたことが、とても心に残っています。だから、その子が生まれる前や生まれてからしばらく経った時も私は、障がいを持っていてかわいそうだから、他の子は一人でできてもいところの子には少し難しいかもしれないからと

勝手に決めつけて、色々とお世話をしていました。しかし、それは本当に正しかったのかと思い返すと、必ずしも良くなかったのかなと思います。これは、中学校の道徳の授業でみんなの意見を聞いて気が付きました。私達もそうですが、自分でできることまで全部されると少し悲しくなってしまうです。これは、障がいのある方でもみんな一緒だと思います。本当にサポートを必要としているところに手を差し伸べるということは、大切だと思います。しかし、そうでないところまで手助けしてしまうと、その人の大事な成長までも止めてしまうことになるのだと分かりました。小さくてよくお世話をしていたいとも、今や立派な小学生です。弟もいて、その子の面倒も見つつ、大好きなダンスや音楽もしていて、最近では水泳も習い始めたそうです。だんだんと自立してきて意見もしっかり言えるようになったいところを見ると、私や家族からの手厚すぎるサポートは必要なくなってきたいるのだらうなと改めて思いました。いここに限らず、他の障がいのある方を見ても、人それぞれではありますが、かなり自立していて障がいのない方と同じように働いていたり、

学校に通っている人がいます。また、この夏、阿波踊りに行った際もダウン症の女の子が踊り子さんとして踊りに参加しているのを見ました。このように、障がいのある方が大きな活躍をしているのを見ると、とても嬉しくなります。

私は身近にダウン症のいところがいて様々な気付きがありますが、このような環境におかれている人の方が少ないと思います。だから障がいのある方と関わる機会があれば、積極的に参加してほしいと思います。また、障がいのある方もない方も得意なことと苦手なことがあるということには変わりありません。「障がい者」という言葉を完全になくしてしまふのは難しい事ですが、お互いを同じように尊重し合い、助けを必要とする人には自然と手を貸すことのできるような世の中になってほしいです。